「救援にまた出かけたい」

車強奪以外は順調

ザイールから帰国し報告会

患者治療、日に300人

平野さん 和気さん

ザイールでのルワンダ難民救援活動から帰国した非政府組織（NGO）「ルワンダ難民救援グループ」（原田豊己代表）のコーディネーター、平野恭助さん(35)＝浅口郡里庄町新庄＝と看護婦の和気一栄さん(29)＝倉敷市松島＝が六日、岡山市内で帰国報告会を開いた。平野さんは十一月初めにトラックが奪われる事件に遭遇したが、「また救援活動に行きたい」と抱負を話した。

平野さんは十一月二日にゴマに入り、アジア医師連絡協議会（AMDA）の医師らとキブンバキャンプで活動した後、十九日にブカブに移り、国連との交渉などにあたった。「トラック強奪に危険を感じ、その後も銃声を聞いたが、ブカブでの活動は順調だった。医師のあらゆる要望に対処するのが、自分の課題だと思う」と話した。

ふだんは天理教道竹分教会で働いており、実際に海外でNGO活動に参加するのは初めて。「NGOも宗教も人類の救済という目的では同じ。機会があれば、また参加したい」と意欲を見せた。

一方、和気さんはブカブで約一カ月、AMDAや現地の医師、看護婦らと二日二、三百人の患者の治療を続けた。「難民のテント生活の中で初期医療が充実していたことに感心した。現地のスタッフもしっかりしており、やればできる、と思いました」と話した。

救援グループはAMDAなどで構成され、ゴマから撤退した十一月中旬以降も、ザイールのブカブ、ルワンダの首都キガリで難民の治療を続けている。

「これからも機会があれば出かけたい」と話す平野さんと和気さん＝岡山市栖津の菅波内科医院で